

鹿児島大学附属図書館と生涯学習

鹿児島大学附属図書館長 平井 一臣

はじめに

鹿児島大学附属図書館は、鹿児島大学の教職員の教育・研究支援を基本としているが、キャンパスを超えて地域社会とどのようにつながっていくのかということも、図書館業務を考えるうえでの重要なポイントのひとつとなっている。とくに、全国の国立大学が大きく三つのタイプに分類されるなかで、鹿児島大学は地域貢献を重視するタイプを選択し、また、COCセンターの設立、COC+のスタートに続き、2017年度からは地域人材育成プラットフォームが始まるなど、鹿児島大学の教育・研究と地域との結びつきは急速に強化・拡大されつつある。このような大学全体の地域連携方針と連動したかたちで、附属図書館には何が求められ、何ができるかを検討し、対応を考える必要がある。

では、大学の地域貢献という問題と生涯学習はいかなる関係にあるのだろうか。2013年に制定された「鹿児島大学生涯学習憲章」は、生涯学習を「大学と地域をつなぐ営み」と位置づけ、「鹿児島大学がめざす生涯学習とは、地域に生きる人びとと大学人がともに学び教え合う関係から知の循環を促し相互に成長していくこと」と述べている。生涯学習もまた大学の地域連携の不可欠の一環であるとともに、地域連携を深化させるツールでもあると言えるだろう。

このことを前提として、本稿では、生涯学習という観点から現在の鹿児島大学附属図書館の現状と課題を考えてみたい。なお、鹿児島大学附属図書館は、郡元地区の中央館、水産学部分室、桜丘分室の3館を擁しているが、本稿では主として中央館を中心に論じることとする。

1. 国立大学図書館協会「ビジョン2020」

鹿児島大学附属図書館も加盟している全国組織・国立大学図書館協会は、昨年「国立大学図書館機能の強化と革新にむけて～国立大学図書館協会ビジョン2020～」を策定した。同ビジョンでは、大学図書館の基本理念を以下のように規定している。

「大学図書館は、今日の社会における知識基盤として、

記録媒体の如何を問わず、知識、情報、データへの障壁なきアクセスを可能にし、それらを活用し、新たな知識、情報、データの生産を促す環境を提供することによって、大学における教育研究の進展とともに社会における知の共有や創出の実現に貢献する。」

以上から、大学図書館の基本的機能が学術研究及びそれを背景とする教育の発展に資することにあることは明白であるが、それらが「社会における知の共有や創出の実現」にも寄与することが求められている。ビジョンは、「知の共有」「知の創出」「新しい人材」の三つの重点領域から構成されているが、生涯学習と深く関連するのは「知の創出」である。すなわち、「大学図書館は、これまで人と知識や情報、あるいは人同士の相互作用を生み出すコミュニケーションの場であり、知を創出する空間であった。これからは、旧来の「館」の壁を超えてその場を拡張し、さらには物理的な場だけでなく、知のネットワーク上に存在する仮想空間を新たな知を創出するための場として活用することにより、教育・学習の質を向上させ、研究活動を支援するとともに、大学と社会との連携を促す」と記されている。とくに、この重点領域のなかで掲げられた二つの目標のうちの一つ「社会に開かれた知の創出・共有空間の提供」においては、「国立大学図書館は、学術コミュニティに限らずさまざまな人びとが知を媒介として集い、さらに新たな知の創出と共有を実現する場を提供する」としており、大学図書館のミッションの一つが広く社会における学習活動にも寄与することにあるとしている。

実は、「ビジョン2020」に謳われたこうした理念と関連する考えは、先に触れた「鹿児島大学生涯学習憲章」にも記されている。すなわち、同憲章は5つの方針のうちの一つとして、「大学の専門知と科学知が、地域の生活や経験と向きあうことを大切にします。そのことを通じて学問を鍛え直し、新しい社会を展望できる知を創造し、広く地域に還元していきます」と謳っているのである。

「ビジョン2020」や「鹿児島大学生涯学習憲章」に共通してみられるのは、大学の知を社会に提供するという一方通行の考え方を脱し、大学と地域や社会との相互の交流を

通して新たな知を創造していくという双方向的な関係の構築を目指す点にある。大学と地域社会との双方向の交流を通じた知の共有・創出のために一定の役割を担うこと、すなわち大学と地域社会の知の結節点としての役割を果たすこと。これが生涯学習という観点から考えた大学図書館のミッションということになると思われる。

2. 鹿児島大学附属図書館中央館の現状

では、大学と地域社会の結節点として現在の附属図書館がどの程度の役割を果たしているのだろうか。このことを考える手掛かりとして、図書館の利用状況に関連するごく基本的なデータを紹介しておくことにしよう。

附属図書館のユーザーの中心が本学の教職員であることは言うまでもない。それでは、いわゆる学外者と呼ばれる人たちは一体どれくらい利用しているのだろうか。2015年度のデータでは、1年間の学外者の入館者数は、延べ22,568人であった。この年の全体の入館者数は、362,712人であり、学外者が占める比率は、6.2%であった。学内者と比較した場合の特徴の一つは、時期による入館者数の増減の幅が小さいという点である。学内者の場合、最も少ない3月の入館者数が、7,500人、最も多い7月が、48,000人である。ピーク期と閑散期の間には6倍以上の開きがある。これに対して、学外者の場合、最も少ない3月が1,069人、最も多い10月が2,671人で、その差は約2.5倍。学内者の圧倒的多数は学生であり、試験前や様々な課題が出される授業期間中に入館者数が増える。これに対して学外者は、年間を通してコンスタントに利用する傾向にあると言えるだろう。また、ピークの時期が、学内者の場合、定期試験前であるのに対して、学内者は、10月、11月がピークである。やはり「読書の秋」が人びとを図書館に引き寄せるのであろうか。

次に、学外利用者の内訳を見てみよう。まず、本学の生涯学習活動の一環として行われている公開授業の受講生(学外者に分類するのが妥当かどうかは微妙なところであるが、ここでは、主として学外での活動を主としており、大学による生涯学習の一環として行う事業の利用者であることから、学外者に含めることにする)の入館の延べ人数は、年間2,041人であり、学外者全体の1割弱である。学外利用者のなかで最も多いのは、継続利用者用図書館利用証の所持者で、延べ人数は13,422人、全体の6割を占める。



学生と一緒に図書館を利用する公開受講受講生

また、一時利用証による延べ入館者数は、5,767人である。これらの学外利用者用の利用証所持者の内訳を見ると、他大学の学生が760人、他大学や研究機関等の研究者が188人、そして、本学の卒業生または退職者が692人である。この三つのカテゴリーを足すと1,640人となり、ほぼ学生ないしは研究者とみなすことができるだろう。これらのカテゴリーに含まれない「その他」に分類される人びとは、3,581人。どのような人びとなのかは分からないが、学生でも研究者でもない一般の市民の方々であると考えてよいだろう。とすると、鹿児島大学附属図書館中央館に関して言えば、それなりに多くの市民の方々も、本館に来館し、様々なサービスを受けていると言えるだろう。

最後に、図書(含雑誌)の貸出の状況を見ておこう。2015年度の中央館の総貸出人数は、32,837人、総貸出冊数は、61,541冊である。1人当たり1.87冊である。学外者の場合、貸出人数は1,323人、貸出冊数は2,305冊で、1人当たりの貸出冊数は1.74冊で全体の平均よりも若干下回る。ここで注目したいのは、公開授業受講生である。貸出人数は364人、貸出冊数は857冊となっており、1人当たりの貸出冊数は2.35冊である。公開授業の受講が、積極的な図書館の利用に結びついていると言えるだろう。公開授業の受講を通して知的好奇心を高め、さらなる学習のために図書館に向かう、という姿が目に見えよう。

3. 今後の大学教育と生涯学習

以上見てきたように、鹿児島大学附属図書館中央館に関して言えば、一般の市民の方々のそれなりの利用があり、また、大学による生涯学習の一環として取り組まれている

公開授業の受講生が比較的積極的な利用者になっている。

このように比較的多くの市民の方々に利用されている背景の一つとして、中央館がある郡元キャンパスの地理的な条件を指摘することができる。鹿児島中央駅から路面電車で10分ほどの好立地にあり、バスやJRの利用も含め、交通アクセスは極めて便利である。また、キャンパス内には林園や農場など、散策に適した空間も多く、図書館で知的作業を行いながら気分転換もできる好環境にある。したがって、市民の方々の本館の利用は今後増えることはあっても、減ることはないだろう。

こうした恵まれた環境にある本館であるが、生涯学習と関連して、今後検討していかなければならない課題があるのも事実である。ここで、そのいくつかを紹介しておきたい。

第一は、鹿児島大学の教育改革と関連した図書館の機能の拡大に係る問題である。周知の通り、この間の大学教育改革は、学士課程の実質化を軸にドラスティックに変化してきている。鹿児島大学においても、2017年4月より、全学共通教育機構が発足し、また、全教員が主担当の部局以外でも副担当としての授業を行う「働き方モデル(仮称)」が実施に移される。

こうした全学的な教育改革のなかで強化されることの一つに、アクティブ・ラーニングがある。アクティブ・ラーニングにも様々な方法があり、今後もなお新たなやり方の開発が進むだろう。いずれにしても、旧態依然とした教員の一方通行的な講義は減少し、ヴァリエティに富んだ授業が増えていこう。そのような授業形態の多様化に対応して、全国の大学で整備が進められているのが、ラーニング・コモンズである。空間を細かく仕切らず、また、多様な学習を自由に組み立てられるように机や椅子、ボード等の配置や形状に工夫を凝らし、ネット環境はもちろんのこと、学習支援の人的サポートも備えた施設であり、各大学が様々な工夫を凝らしている。私立大学のなかには、ラーニング・コモンズ専用の施設を新たに建造したところもあるが、国立大学法人の図書館の場合、耐震補強のための改修工事を利用してラーニング・コモンズを整備した所が少なくない。しかし、本館の場合、耐震補強の対象ではないため、ラーニング・コモンズの整備に向けた検討に着手できないでいた。とは言え、上記のような鹿児島大学の教育改革が本格的に始動するのに応じて、本館におけるラーニング・コモンズの可能性を追求する時期に来ているように

思う。

もちろん、ラーニング・コモンズの機能は、図書館のみが負うものではない。鹿児島大学には、学生交流プラザや教育学部のアクティブラーニングプラザがあり、また、共通教育棟の教室の一部にはアクティブ・ラーニング用の教室も作られている。それらの施設との機能的な棲み分けと連携が必要になってくる。では、他の施設と比較した場合、図書館が有する強みとは何だろうか？少なくとも2つの強みを図書館は有している。1つは、学術情報が集積した空間であることである。多くの書籍が利用できるだけでなく、書誌情報や新聞記事検索などの情報アクセス、さらには専門的知識を有する職員からのサポートもある。学習者は、その場で多種多様な学術情報に接し活用しながら学習することができる。そしてもう1つの強みが、開放された空間であるということである。現在は大学自体が市民への開放性を高めているが、とりわけ図書館は、先に見た学外利用者の状況にも示されるように、恒常的に市民に開かれた空間になっている。様々な人々が行き交い、交流できる場でもあると言ってよいだろう。このような図書館が有する強みを活かしたラーニング・コモンズの整備が望ましいと言えよう。

さらに言えば、鹿児島大学が地域貢献をさらに進めようとするならば、図書館のこうした強みを活かしたラーニング・コモンズの整備は急務である。4月からスタートする地域人材育成プラットフォームでは、地域に関連し、かつ新たな教育手法を積極的に取り入れた授業が準備されるはずである。そこでは、単に地域を対象とするに留まらず、授業を通して地域と結びつくことの意味を問い、あるいは地域と結びつくための実践的な知を追求することが試みられるだろう。このような試みを効果的に行うためにも、上記の強みを活かした、つまり多様な人々が行き交う学習空間としてのラーニング・コモンズが必要なのである。このような開かれた学習空間は、図書館の利用者の幅をさらに広げるばかりでなく、学生や教員と市民との接触や交流を深める機会を提供していくことにもなるだろう。その結果、大学の教育研究と生涯学習との新たな接点が生まれることにもなる。

第二に、積極的な学術情報の発信と提供の機能の強化である。鹿児島大学附属図書館では、毎年1回、貴重書展を開催し、本館が所蔵している学術的な価値を有する資料類を公開してきた。また、昨年開催した貴重書展「玉里文庫



「絵巻物の原寸レプリカの説明を聞く来館者」

善本点-国文学・近衛家・蘭学・琉球-」（開催期間：9月9日～10月13日）では、富士ゼロックスの協力により作成された絵巻物の原寸大のレプリカも展示した。一般市民の方々には縁遠く感じられる学術情報を少しでも身近なものとして受け止めてもらえたのではないかと思う。中央館1階のアトリウムでは、上記の貴重書展をはじめ、サークルによる展示や研究成果に関する展示も行われている。2016年に開催された研究成果の展示としては、「鉱物資源の展示」（開催期間：7月9日～8月8日）、「総合研究博物館第16回特別展『水から陸へーカニたちの多彩な生活』」（開催期間：10月20日～11月16日）が開催された。

こうした企画展示だけではなく、鹿児島大学の教員・学生と市民との交流の場を通した生涯学習への貢献の機会も設けられないかと考えている。現在附属図書館では、図書館サポーターという学生グループが様々な活動を展開している。学生選書ツアー、ビブリオ・バトルやクリスマス企画としての本のポップツリーの制作、「図書館セレクションー本の福袋ー」の企画・実施など、本好きの学生たちが工夫を凝らした取り組みを行っている。こうした取り組みには職員の方々も積極的に支援してくれている。ただ、今のところ、このような学生と職員の協働による取り組みはあるものの、教員が関与した取り組みがみられない。それぞれの専門領域で研究活動を行っている教員による情報提供の場を設けられないだろうか。そんなことはネットで発信すれば十分であるとか、学会等の専門家集団のなかで行えばよい、といった意見もあるかもしれない。しかし、フェイストゥフェイスでしかできない情報伝達、あるいはフェイストゥフェイスだからこそ可能な情報伝達というものも

あるだろう。たとえば、毎年、鹿児島大学の少なからぬ教員が著書を公刊しているが、「著者が語る」といったかたちで、一冊の本が出来上がる背景やその本に込められた意図などを話してもらい、それを題材として意見交換を行うということはできないだろうか。もちろん、学外の市民の方々にも公開の催しとして行う。一冊の本をめぐり、著者本人、学生、職員、そして市民の方々が様々な意見を交わす場を提供する。多くの研究者を抱える大学の附属図書館ならではの取り組みになるのではないだろうか。



附属図書館主催の貴重書公開講座

おわりに

私自身は生涯学習については全くの門外漢であるが、生涯学習における大学図書館の意義には、少なくとも二つの意義があると考えている。一つは、地域の人びとが生涯にわたって学ぶ意欲をもち実際に学んでいくプロセスに、学術情報の提供という面からサポートすることである。もう一つは、大学で学ぶ学生たちが、自分たちよりもはるかに上の世代の人びとの学ぶ姿に接する場を提供することである。基本的に大学のキャンパスで学ぶ学生の多くは20歳前後の、社会経験も乏しい若者である。卒業とその後の就職を視野に入れた学習に追われている学生たちにとって、（もちろん当面の目的のために学ぶことも必要ではあろうが）、様々な年代の人びとが学ぶ姿に直に接することによって、本来学びがもっているはずの射程の広さを知る機会になるのではないかと思う。

以上、生涯学習の観点から、現在の鹿児島大学附属図書館の現状と課題について、思いつくままに書いてきた。今後の取り組み課題として書いたことには、私自身の個人的

な見解もかなり入っており、今後どこまでできるのかどうか不明な部分も多い。また、大学図書館が生涯学習と大学との結節点としての役割を果たすうえで、もっと効果的な方法や適切な方法があるのかもしれない。試行錯誤を重ねていくしかないが、大学の教職員、学生、そして地域の人びとが自由に交流し、ともに知的好奇心を高めていけるような空間や機会を提供していくことが重要であろう。